

実践理論と存在論

田辺繁治とマルセル・モースを中心に

はじめに

- 人類学における「存在論的転換」
 - Eduardo Viveiros de Castro
 - Martin Holbraad, Morten A. Pedersen (Henare et al)
 - 「世界についての認識ではなく、世界がどのように作られているかを見る」
- 科学技術論、実践理論との共通点
- 存在論が意味するものの曖昧さ (Jensen and Morita 2012, Gad et al, forthcoming)

目次

- 二つの存在論
- 実践理論と存在論：田辺繁治とANT
- モース技術論と機械の概念
- 結語：実践と機械の概念

二つの存在論？

- 科学技術論における存在論
 - 1980年代における研究対象の転換
 - 理論(世界認識の枠組み)から実験(対象を操作する物質的实践)へ
 - 全体的なシフト: 科学哲学(Hacking ほか)、科学史(Galison ほか)、技術史(Hughes ほか)、科学社会学(ANT, Pickering など)
 - 実験、技術開発、観測などをとおして、科学的事実(素粒子、Co2による地球温暖化、熱帯雨林の生態系など)はいかに構築されるのか(Edwards, Galison, Latour) ?
 - 実験、および技術的实践についての民族誌、社会史に立脚した議論(特定の理論的立場ではない)

二つの存在論

- 社会科学におけるSTS的存在論の一般化
 - 地理学: 環境問題、空間の物質性、都市インフラ
 - 人類学: multi-sited ethnographyとの共鳴。ANTによるミクロとマクロの架橋(足立)
- VDCの存在論
 - アマゾニアのパーспекティヴィズムにおける身体・精神(魂)関係に基づく発想
 - Strathern の Gender of the Gift, Partial Connections における反省的方法: メラネシアの概念を経由して、西洋的な分析概念を再編する
 - Holbraadらによる一般化

二つの存在論？

- 存在論をめぐる混乱
 - Strathern 的リフレクシヴィティ: *Writing Culture* への反応
 - Bill Maurer, Annelise Riles, 宮崎広和: “Lateral ethnography”
- 現実批判の人類学(春日さんの解釈)
 - Post writing culture と存在論的転換を Strathernを介してつなげている
 - 欧米では二つは別ものとされている(欧: 存在論、米: pwc、例外: デンマーク=日本とほぼ同じ解釈)
 - Hau 特集 (Jensen and Morita) でのジャーナル編者、コメンテーターの当惑 (Bill Maurerが最終段階でコメンテーターを降りる)

二つの存在論？

- 科学技術論
 - 実験、技術的実践の研究
 - これらの実践をとおして、実在物／科学的事実はいかにして生まれるのか
 - それらはどのように流通するのか
- 人類学
 - ひとつの世界の多様な認識(自然と文化の西洋的二元論)を乗り越える
 - 世界そのものが多様であるという認識は可能か？

二つの存在論

- 科学技術の人類学の立場から
 - 基本的な立脚点は科学技術論の存在論
- Lateral ethnography: 分析者の枠組みを対象(科学者、専門職、市井の人々)との相互作用をとおして変容させる試み
 - STSにおける対象との関係性(科学者の認識 > 科学社会学者の認識)との親和性
 - ANT(「アクターを追いかける」)を一步進める見方として関心が持たれる(ethnography of professions 一般に見られる傾向)
- 人類学的存在論: 科学と在来知の対称的な扱い?
 - VDCらの全体化傾向 VS STS: 実践における局地性

実践理論と存在論

- STSと人類学的実践理論との共通点
 - とともに実践に焦点を当てる
 - 未分化の力／non-human agencyとそれに形を与える社会的実践（儀礼、実験／観測）という根本的な存在論
 - Deleuzeの潜勢的(virtual)／現実的(actual)の区分との類似
- 日本における存在論の受容
 - 欧米に比べてANTがスムーズに受け入れられた
 - 実践理論の延長線上に位置づける解釈が主流（大村さんなど）
 - 欧米（とくに欧）人類学の解釈と根本的に異なる
 - モノへの視線の違い（足立さんのThinking through Things 批判）

田辺実践理論と存在論

- 『精霊の人類学』
 - 「精霊を表象としてではなく、実在する力として扱う」
 - 不定形な力に形を与える儀礼
- 森(𠩺)に存在する不定形の力
 - 森での作業中に一撃を受けて意識を失い、体調不良に陥る
 - 体調不良の原因を呪医が探る。儀礼をとおして、森の精霊(体調不良の原因)の名前と性質を確定する。
 - 森に代表される外的な不確実性と身体における内的な不確実性

田辺理論とSTSの親和性

- 不確実性への着目
 - 森: 環境についての認識の部分性、環境の複雑さ不確実性
 - 身体: 身体の内的過程の不可視性、心身症、慢性病などの診断／治療における不確実性(AIDS自助グループ)
- コンムアン(北タイ人)の身体論
 - 32の魂(๓๒)が体の各所に宿る
 - 外的な力(精霊=ผี)の襲撃によって魂が体から離れる(๓๒หาย) = 病気
- 科学における不確実性(環境と身体)とコンムアンの身体論のシンクロ
- 不定形な力を分節化(articulate)する手段としてテクノロジーと儀礼が同列かつ同居(AIDS自助グループの例)しうる

不定形な力と分節化

- Latourの実験論
 - 不定形で不確実なnon-human agencyを科学的実在物(微生物など)の形に分節化(articulate)する
 - 田辺実践理論との親和性
- 『精霊の人類学』における多元的認知モデル
 - モーリス・ブロックの二元認知モデル (Bloch)
 - 日常的認知(普遍的) vs イデオロギー(社会固有)
 - 身体を中心とした日常的な認知枠組み
 - 儀礼の場で構成されるイデオロギー的認知(イデオロギー=イメージをとおした現実把握(アルチュセール))
 - それ以外の認知モードの可能性: 自己統治の実践に基づく自己理解
 - 科学的実践に焦点化したSTSに対する重要な示唆

マルクス主義のルーツ

- 田辺実践理論とマルクス主義のルーツ
 - 生産力と生産関係：潜在的なものと現実化されたもの（ただし、潜在的なものは科学的客観的に把握可能）
 - マルクス主義における客観的な最終審級の否定（精霊は実在する力）
- STSにおける科学の物質文化論
 - 非マルクス主義的唯物論の探求
 - 技術論における不確実性の強調
 - 中岡哲郎：「技術に内在する未知」
 - マルクス主義と非マルクス主義技術論の収斂
 - モースの技術論の目指したもの？

モース技術論と機械の概念

- モースの技術論
 - Leroi-Gourhanなどを介してフランスの技術論に大きな影響
 - 非マルクス主義的技術論
 - デュルケーム社会学における社会形態学(エスキモー研究)の一部
 - 同時代の機械工学、技術史、科学史、社会経済史との密接な関係
 - 社会学の位置部門としての科学技術史の構想
 - 『民族誌学マニュアル』の技術の章は、モノを中心とした技術論の試みとして読める

モース技術論と機械の概念

- モース技術論と実践の概念
 - 社会形態学
 - 社会生理学: 表象の生理学(宗教生活の原初形態)、実践の生理学(モース技術論)
- 効果的な伝統的行為 (actes traditionnels efficaces)
 - 呪術、法的行為(契約など)、技術
 - 技術とは、「機械(物理)的、化学的な効果をもたらすと考えられている伝統的な(社会的に学習される)行為」である
- Techniquesとtechnologie: 技術にあたるのが前者、後者は技術論(フランスにおける古典的な区分)

モース技術論と機械の概念

- モース技術論の基本枠組み
 - 基本単位：効果的な伝統的行為
 - クラフト／産業：一定の目的（生産活動等）のために行為が組み合わされたもの
 - 料理や消費も含む：経済活動としての産業とは異なる
 - 社会（基体）：クラフト／産業が組み合わされて形成されるもの
 - 行為を単位とするこの見方では、土台としての経済、上部構造としての社会という区分はない（非マルクス主義）

モース技術論と機械の概念

- 産業と技術の分類
 - 「一般的な用途のための一般的な技術」
 - 火、ハンマーの仕様など一般的に用いられる技術的行為
 - 「一般的な用途のための専門的な技術」／専門的な用途のための一般的な産業」
 - かご作り、武器作りなど
 - さまざまな用途に用いられる道具(刃物)を作る専門的な技術
 - 「専門的な用途のための専門的な産業」
 - 狩猟、農業、衣服制作、航海術など
 - 特定の目的のために特化した産業

モース技術論と機械の概念

- モースによる技術分類の意味
 - 難解で非直感的な分類
 - 道具の製造と使用によって媒介される行為の連鎖に焦点を当てる
- モースの道具分類との結びつき
 - ツール: 単一の部品から出来ている道具 (タガネ、槌)
 - 器具: 複数のツールの組み合わせからなる道具 (ナイフ = 刃 + 柄)
 - 機械: 複数の器具の組み合わせからなる道具 (弓矢 = 弓 (弦 + 弧) + 矢 (鏃 + 軸 + 羽根)、船 = 船体 + 櫂 + 舵)
- 道具の複合的性格は、分業を反映している (鍛冶 + 木工、専門分化)
 - 道具の構成を媒介として技術的行為が結びついている

モース技術論と機械の概念

- 複合的な人工物としての機械の捉え方
 - 機械工学における古典的な見方
 - Franz Reuleaux「複数の部分から構成されその相対運動によって仕事をするもの」(現代の機械工学における定義)
- モースの技術論による拡張
 - 機械の複合性: 技術的行為の連鎖を形作る

マンフオードによる拡張

- 巨大機械 (the megamachine)
 - ルーローの概念からの出発
 - 近代機械発達の前に、ルーローの定義に当てはまる社会的な機械が存在した
- ピラミッド建設などの巨大事業
 - 精緻な計画／分業と計算されたコーディネーション
 - 人間とその組織、天文学(暦)や計算を組み合わせて、特定の目的(建設)を達成する社会的機械
 - ハイブリッド: 人間、モース的な機械(クレーン、滑車など)、宗教、科学(天文学)の結合
- 異種混交的な結合としての機械 → ドゥルーズ／ガタリへ

まとめ

- 実践理論における物質性
 - The virtual/the actual
 - 潜勢的な力に形を与えるものとしての実践
 - 機械的結合：物質的な効果を生み出すための行為、人工物、表象などの結合（モースとマンフォードの技術論）
 - 機械工学の機械概念の影響
- モースの特異性
 - 人工物の内的構成が外的な社会関係を反映する
 - 内と外が相互浸透的な世界：Leroi-Gourhanにも見られる特異な見方

まとめ

- 世界制作の機械に立ち返って
 - 潜勢的な力に形を与える物質的な連鎖＝機械
 - 前提となる潜勢／現実の二項対立を反省する必要は？
 - VDC流の全体化された存在論との差異を明確に意識する必要
 - スムーズすぎる対称性？
 - 田辺実践理論とANT: 儀礼と科学の間に見られる対称性
 - 日本におけるANTのスムーズな受容
- 機械をめぐる諸議論
 - 機械の一般イメージに基づく比喩 vs 機械工学の基本原理の拡張
 - 理論ではなく、技術論の拡張